
C † B

鶺鴒瑠李

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C†B

【Nコード】

N92250

【作者名】

鵲鴿瑠李

【あらすじ】

天才が代名詞の二トと宝の持ち腐れが代名詞の警察官、準天才が代名詞の中学生、暴れ馬が代名詞の元凶人。

そんな彼らが組織するのはC†Bという警察の特殊組織。

そしてそれに敵対するのはある財閥の娘が率いるBKという組織。

なんとBKのボスは天才二トのことを愛している？

【clever boy】（前書き）

血の表現があります。残酷とまでは行きませんが、苦手な方は注意してください。

【clever boy】

灰色、雲、大雨、曇天。雨が降るある日の夜、山の奥のさらに奥深くの本当に小さな小屋に明かりが灯る。

コツ、硬いものに硬いものをおく音。音源は四角い板と上部が王冠の形をした駒のようなもの。

チェックメイト

「王手」

まだ変声期を終えていない少年の声がする。年のころは声に合わず十代後半だろうか、髪の色は闇のように深い黒で、服はその反対色である純潔の白。肌の色は陶器のとうな白く、首元は破られたように開いているが袖は長い。そして袖口から微かに見える指は盤上にある王冠に形をした駒に添えてある。盤を乗せている机にはそれの他に、十分にとはい言いい切れないほどの火を灯した蠟燭がある。

彼は駒から手はずし、座っている椅子のクッションのような背凭れに背中を預けた。

溜め息、自分の手を見る。そして呟く。

「つまらない、なあ……」

少年の呟きは闇に消えた。

第一話【clever boy】

殺人、事件、犯人不明、これらが表すものは何か、答えは警察。最近この都市では犯罪が急増している。理由はまだ分からない。ただわかるのは共通するものがあること。共通するもの、それはその事件での殺人が起こった場所には必ずチェスで使う黒のキング（王）がおいてあることだ。指紋などは一切出ない。これも共通している。そして、その事件を解決する人物の共通している。

通称「C＋B」正式名称は何故か誰も知らない。この「C＋B」と呼ばれる組織は警察の中で最も優れた人物しか入れない。そして

組織にいる人数はその警察を入れて四人。一人はその優秀な警察、一人はネットを巧みに使う中学生、一人は毒を打たれても死なない元囚人、そして、最後の一人が幼き頃より神童があだ名であるこの組織のボスの二ート、もとい探偵。

彼らは金では動かない。ただし、金の代わりになるものを払わなければいけない。それは「おもしろいもの」である。彼らにとつておもしろいものとは一般人とは少し外れている。こういった殺人事件などの犯人探しこそが彼らの「暇つぶし」。一人に頼むのならば、その人のおもしろいものを与えればいい。しかし、“彼ら”に何かを頼むなら、「犯人探し」ともう一つ、「チエス」しかない。

± ±

紅、赤、血、人、殺……事件。僕らを、否僕を楽しませてくれるもの。でも、すぐに飽きてしまう。最近は事件が多い。だから飽きない。でもすぐに厭きてしまう。警察から派生した組織のボス的存在になってからというもの、中々自分の好きなことをする時間が無い。それでつい一週間ほど前からとある山の偶然見つけた小屋に寝泊りしていた。食料は十分に持ってきていたし、遊び道具も持ってきた。蠟燭と、ライターも持ってきた。でも、そろそろ飽きてしまった。ラジオもなければテレビもない。携帯もない。まあそれ以前に携帯が繋がるか、という問題もある。潮時か、と思つてまとめていた荷物をリュックに詰めてそれを背負う。ドアを開けようとしたとき、僕ではない何者かによつてドアが開いた。

それは僕の組織にいる仲間の長谷川森羅はせがわしんらによるものだった。彼は右手におそらく森に落ちていたであろう木を、左手には小型のノートパソコンをもっている。右手で持っているものに関しては全体重に近いものをかけているようにも見える。彼は毛先が茶色がかつた髪を朝日に輝かせ、学校に行く途中だったのだろうか、学ランを着ている。しかし、裾や袖などには泥がついているし、時間帯的には

もう遅刻は免れない。頬を赤くし、息切れもしている。走ってきたか、一晩中探し回ったようだ。あるいは両方か。そして、彼の後ろには同じく僕の組織にいる五十嵐勇人いがらしゆうじんとまたまた同じく僕の組織の草加直人くさかななおとの姿。二人に関しては汗一つ、息切れ一つしていない。それどころかどこか涼しい笑顔を僕に向けてくる。少し腹立たしい。

「さ、がしまし、たよ！ 神原かみはら、由悟ゆいつ！」

森羅が息切れをしながら僕に言った。

「探してくれって頼んだ覚えはないんだけどなあ」

「警察から依頼だ。面倒臭エけど」

「まあまあ、とりあえず資料読んでから引き受けるか否かを決めよう」

草加がそういつて（自分の家でもないのに）先ほどまで僕がいた小屋に入るように全員を促した。

「事件が起こったのは一昨日、十月二十一日土曜日午前九時三十八分——」

草加が語る事件の簡単なあらすじはこうだ。

一昨日の午前九時ごろ、友達の家に遊びに行く予定だった小学生三年生の少年が小さな路地で“たまたま”人の死体を見つけた。その死体には首がなく今探している途中らしい。そしてその死体は大きさは百七十センチほどの大きさ（首含む）、三十代前半の男性。ジャージを着ており、首元にのみ血が付着していた。しかし、これだけの血が出ているのにもかかわらず道にはどこにも血がついていない。そして、その死体の近くには黒のキング。ちなみにその小学生は重要参考人として警察庁にて保護中。

「なあ、まさかあんたまで引き受けるなんて言わねエよな？」

「受けるけど。一応それで食わせてもらってますから。それにこれはおもしろいし」

「言っておくけど、その小学生にはアリバイもあるし犯行も不可能だからね。道に血が付着していないからそこできつと他のところで殺して運んだと思っているかもしれないけど、人間が筋力を最大に

して運べる重量は自分の体重の約二倍。小学生とその三十代男性の体重は三倍近く違うからね」

「別にその小学生が男性を運んだなんて思っ
てないよ。犯人は分か
ったよ。でも、その黒のキング……
気になるなあ。是非一度手合
わ
せしてみたい」

本当に気になる。黒のキング、通称BK。^{ブラックキング}僕に挑戦状でも投げ
つけるかのようなこの行為。人の生死以前にすぐく、すぐくすぐく
ごく気になる！ 一個のものに固執したことがなかった。自分の反
応にも、黒のキングの正体も、全てが知りたい！

「はあ、今回も俺の出番なしかよオ」

「あるよ。君、子供をあやすの得意でしょ？ その小学生にちよつ
と法螺吹き込んできて」

「あ？ 何言やアいんだよ」

「簡単だよ。——、分かった？」

「お、おう……」

「ハハ、ハハハッ！ 面白い面白い面白い！ さあ、盤上に上って
あげようよ、生贄の捨て駒^{ポーン}のためにさ！ ハハハハッ！」

キキ

晴天。雲の量で見れば晴。怪しい雲行きもない。そんな火曜日の
昼。今警察庁では冷戦とも言える戦いが始まるうとしていた。

「許可できん！」

男の声が響く。バスの音域だが、広い部屋でも十分に通る声。

「だからー、あんたの意見は求めてないの。というか俺たちのキン
グがもう動き出したからもう遅いよ」

「担任、神原は今まで一度も犯人をはずしたことがない。それなの
に信用できないのですか？」

「そついう問題ではない！ 今回、お前らが犯人と思しき人物は……」

……

「今回の第一目撃者山崎心君。小学三年生。凄いなえ、黒の方は警視總監の息子さんまで手駒にするなんて！ しかも、アリバイはあって精神的恨みもなさそうだし学校では優等生キアラ。誰かを殺すって気持ちを持たなさそうな男の子。反抗期もなく、いつでも笑顔で元氣。これはこれは用意周到なことだ」

男の声を、まだアルト調の声の男が遮り、淡々と今回の第一目撃者の情報を語る。そこにはプライベートなんてあったものではなかった。そして一呼吸おいてアルト調の男は話し始める。

「別に、優等生で殺しをなさそうな男の子っていう情報だけで僕は犯人じゃないって決めないよ。子供だからこそその純粋でかつ残酷な一面もある。しかも男の子で好奇心は旺盛だろ？ 大丈夫、五十嵐に軽くその子に嘘を教えてあげるように言っている。そして時が来れば自然と犯人は口を開くよ。自分がやったって」

「……………」

「やだなあ担任、怒ってる？ そりゃ怒るか、自分の手柄を取られたのと同じようなものだし。じゃあそんな總監にハンデ！ ハンデ一、何故死体は首から下なのでしょう。ハンデ二、首はどこにあるでしょう。ハンデ三、何故小学三年生が“たまたま”人気のない路地裏の死体を見つけることが出来たでしょう。今回は特別ハンデ四…………… 四年前だったかな、事件簿見てご覧よ」

少年がそういうと、バス調の男性は走ってその部屋を出て行った。その数分後、その男性ではなく、小学生ほどの男の子が五十嵐という男と共に顔を見せた。少年は顔を俯かせ、手は後ろにしていた。五十嵐はその少年の横に立ち、案内をするかのように背中を支えている。暫く沈黙が続いたが、少年が手を前に出し、キラリと何かを光らせて神原のほうへ一直線に走っていく。それは時間にして十秒にもみたくない瞬間のような時間。しかしこの空間、この部屋にいるものにとつてはとても長い時間を感じられた。少年が神原にぶつかり、前にしていた手を横に下ろした。身長的に前にあった手は神原の下腹部にあった。少年が手を離れた今、そこにあるのは黒い棒の

ようなもの。だが棒にしては短く、太い。手にフィットするように作られたかのような形状。草加は考えた、これは刃物ではないのかと。

「これで、これで！」

「そう、これで君の夢が叶う。えっと、傷害罪及び殺人と死体遺棄だっけ？ まあそんな感じで君は少年刑務所行きだ」

草加は考える。この目の前にいる神原由悟という男はエスパーもしくは超能力者の類ではないか、と。元々草加は頭脳タイプではないので作戦などを考えたりそれを暗記するのは苦手だ。覚えるなら自分で作戦を練らなければ覚えられない。だが、その作戦を考えるのが苦手だ。だが、その作戦を実行したならば草加の行動力、体力、精神力などからみて成功率は十割だ。宝の持ち腐れとはこのことだろう。何度草加の上司が頭を抱えたことが分らない。しかし、神原はそんな上司の悩みを一気に解消させた。神原は見事に草加を作戦通りに動かすことが出来たのだ。そのとき神原はただの無職の成人男性で所謂ニートというものだったが、警察は神原の才能を買ひ引き込もうとした。が、世の中そんなに甘くないのだ。神原は多額の礼金を要求した。払えば入る。払えないのなら自分の要求を呑んでもらう。そういつてのけた。

（その要求が面白かった。だから俺はC＋Bに入った。そして、今俺がすべき事は……）

「なんで、なんでだよ！ 僕はたしかにお前をナイフで、刺したんだ！ なんで死なないんだよ！」

少年が、純粹な質問を投げかける。顔は恐怖の色に染まっている。おそらく、ナイフで刺したはずなのに、服が血でにじまないどころか、痛みすら感じていないかのようなその男の正体への疑問と、常識に捕らわれた考えを覆されたことへの驚きが混ざり、恐怖しているのだろう。

「なんで？ 簡単さ、君のもっているそのナイフ、その図体のかいお兄ちゃんからもらったんだろ？ 残念だけど彼は僕の仲間で

ね、ほら、玩具のナイフとちょっとした嘘を君に届けてくれたんだ」
ナイフは障害物に当たると刃がしまわれるものだった。彼はカシヤ、カシヤと何度もそれを手に叩きつけ、偽物であることを少年の示唆した。

「じゃ、じゃあ“あの首の話”も嘘だったのかよ！」

「そう嘘、全てが虚構、全てが真実、どれか本物が分からない。だけど、一つだけ真実だけが分かる方法がある。教えて欲しいよねえ？ 教えてあげるよ」

神原は饒舌に語った。矛盾したことを言う。少年が欲しているか分からないことを言う。

「どれが真実かしりたいなら全てを滅しなよ。そうすれば、自分が真実になる。そうすれば君が世界だ。まあ、君一人の世界なんて死と同じけど」

「……人に嘘ついたら、悪いんだぞ」

「悪い？ 嘘？ 言っておくけど“騙された”なんて思わないでよ？ 君がそれを信じたんだ。別に彼は信じるなんていってない。君が勝手に真実だと思って、信じてここにきたんだ。それに君のほうが悪いじゃないか。人を殺す？ それ以上の悪があつてたまるか」

激怒、憤怒、怒り。見て分かるように神原は怒っていた。そして、草加によってガタンと音をたてて扉は閉められた。逃げ道はすでない。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。なに、簡単なことだよ。君のバツクにいる存在を教えて欲しいんだ」

「……黒は、悪魔。白は天使。そういえば分かるって黒のお姉ちゃんが言ってたよ。それでねっ僕のお願いを叶えるために色々してくれたんだっ！」

「そ。じゃあタネ明かしでもしてみる？ まず刺された男だけど、とある暴力団の下っ端だね。で、君はその下っ端を路地裏におびき寄せるために黒のお姉ちゃんに頼んでそいつを呼んでもらった。あとは簡単。不可抗力といって首の横にナイフを突き刺し、あらかじ

め用意してあったシートの上に男が倒れるように設定する。で、そのあと血が乾いてからシートを取ってゴミに出せばいい。後日、自分がたまたま見つけたといってヒーローになる……でいいかな？」
「うん、そうだよ。だってヒーローはみんなに嫌われている悪者を殺したってなんもいわないし、むしろヒーローって言ってみんなに喜ばれる！ 暴力を振るったって何したって、ヒーローなんだ！」

少年は純粋な笑顔をみせる。しかし、いつていることは狂っているのと言いたい。ヒーローになりたい。男の子なら、一度は見たことあるような夢。戦隊ものやライダーなどがあって、皆を守るヒーロー。小学三年生の優等生もそんな少年らしい夢を持っていた。ただ、それを現実にしたいと、現実と夢の見分けがつかなくなってしまう。ただそれだけのこと。

「そっか、でもこの場合僕がヒーローだね。まあ僕はヒーローになりたくないけど、君は悪役だ。その事実を変えられない。まあそのなんだろうね、一言で表すなら、チェックメイトだ。黒の負け」

神原は少年の前に立ち、言う。少年はその間顔を下に向け俯いていたが、神原が負けと宣言すると顔を上げ、笑顔になった。

「あーあ、ばれちゃったか。あのね、神原サン黒のキングは神原サンのことが気に入ってるの。黒のキングはそれぞれに役目を持たせている。僕の役目はポーンのアスタ。アスタにはヒントっていう役割があるんだっじゃあ黒のキングヒントー！ 女性。がんばって探してねー」

台詞の後ろに音符がつきそうな勢いで少年は草加の元に行き、自分に手錠をかけるように言った。草加はそれを聞き入れ、ガシャン、と手錠を少年の手に落とした。

少年は草加と共に部屋を出て行った。残されたものはみな一様に神原をみる。神原は顎に手を当て、何かを考える仕草をする。これは神原の癖であり、長谷川曰く「難しいことを考えるときか楽しいことを考えるときになっている」そうだ。パチン、と指で音を鳴らし、ひらめいたように顔を上げる。

「黒道美佳、新橋風、城川茜、すぐ思いつくのはこの三人だね。森羅、情報よろしく」

神原は軽く片手で手を振りながら部屋から出て行った。残された五十嵐と長谷川は二人顔をあわせ、溜め息をついた。

「結局俺の役目って何！？　ただ『あるお兄ちゃん』が首のありかを知っている。殺したかったらおいで』って言うだけ！？」

「僕なんて最後に情報よろしく、なんだけど。ていうかそもそも首のありかってどこ？」

二人、各々の叫びを部屋に響かせた。

＋　＋

神原由悟は雑踏の中に紛れていた。まるで保護色のように自分の存在を隠すために。そして彼は狭い路地裏に駆け込んだ。それに続いて黒い影が一つついてきた。影は路地裏にあるものを探しているのか、路地裏に入ってからずっとあたりを見渡している。そのとき、声は響いた。

「やあ。随分とストーキングしてくれたね。骨格や身長、肉のつき方からして男とは分かっていたけど……まさかホモ？　そうだとっても僕が存在をどこで知ったのか、教えてもらいたいなあ」

陽気な声だ。陽気でいてそれで相手を追い詰めるかのような声。持ち主は神原由悟である。

影は黙る。考える。思考する。内容はどうやって逃げるか、だろ
うか。

「まあ、現時点で答えてもらえるとは思ってないけど。僕が望むのはただ一つ。君の背後の人間をお教えて欲しい。教えてくれたらその情報は誰にも漏らさないし、今の逃げ道だって作ってあげる」

「……………」

影は黙る。自分にとって好都合な取引にも応じず、ただ黙っている。

「これじゃあ話が進まないね。うーん、森羅や勇人にはああいったけど、黒の大体の目星はつけてるんだ。いっちゃえ、いっちゃいなよ」

「……黒は美しい」

影は口を開いた。この瞬間、初めてだ。声の高さは神原とさほど変わらないが、年齢が上なのか声に深みがある。影はそういうとサツとでもいうように去っていった。

「黒は美しい、か……。はあ……閑羅^{かんら}に借りを作るのは嫌だけど仕方ないか」

± ±

数日後。

神原たちは走っていた。都内に逃げ込んだ犯人を追うためだ。神原と長谷川は後ろから。草加は横から、五十嵐が回り道をしての前からといった追い方である。ちなみに犯人から見て右側には大きなビルが並んでおり、その隙間は大人一人が入るとしては少し狭すぎる路だった。犯人、神原、長谷川はすでに息を切らしており体力がもうそろそろなくなりそうなほどに体力を使い果たしていた。草加に関しては車で追っているので論外である。

犯人が立ち止まった瞬間、横から大きな影が犯人の上に落ちた。

そこには五十嵐勇人の姿があった。

「はあ、はあ、強盗、及び傷害罪で、逮捕だね。チェックメイト、はあ」

「くそっ！ てめえらただの一般人じゃねえか！ なんで手を出すんだよ！」

「あ？ しらねえーの、お前。俺たちは神原率いるC＋Bつー組織よ！」

「ま、おとなしくお縄につこーねー」

ガシャン、と強盗犯の絶望と共に手錠が落ちた。

草加は男を連れて行き、神原たちをそこに残した。

「しっかし、ここ暫く黒のほうからこねえーな。平和つつーかなんつーか」

「たしかあの小学生は捨て駒だから次は騎士、道化、兵隊、矛盾、最後に王の順でくる予定ですよ」

「一応ね。でも僕のところだけに多分クイーンがきたよ。いや、キングと呼ぶべきかな」

「え、敵の大将が？」

「いや？ 大将っていうのはね、森羅。使い手のことをいう。多分その使い手の一番槍が僕のところにくたよ」

「……気をつけろよ。てめえはクレバーでもパーフェクトじゃねえんだからよ」

「重々承知の上だよ」

神原は少し苦笑いし、歩き始めた。それみてあとの長谷川と五十嵐も歩き始め、影を伸ばしながらゆっくりと明日へ向かって歩いていった。

チエスボーイ、クレバーボーイ、クレイジーボーイ、様々な意味をあわせ持つこの組織はまだ物語の序章にも入っていない。これから彼らを待ち受けるのは困難、壁、試練などたくさんある。運命のまま流れるか、抗うかは彼らの決断次第だ。

【clever boy】（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想などくれると嬉しいです。

【past boy】(前書き)

今回は若気の至りのようなオハナシです。特に推理という推理はで
てきません。

【past boy】

昔、正確な数値で表すことはできないが、昔。僕がまだ“普通の人間だったころの話だ。僕が才能を開花させたときの話をしよう。”

第二話【past boy】

中学生の秋のことだ。僕らは受験を控え、死に物狂いで猛勉強した。というのは冗談で、普通に、願書を提出する準備や勉強をしていた。推薦組を除いて、だが。

そんな忙しい時期に事件は起きた。

誰が殺されたとか、誰が傷ついたとかではない。“消えた”のだ。ありえないものが。盗んだとしても特にメリットがないものが。真っ先に疑われたのはクラスメイトの紀伊だった。彼は生徒会に目をつけられているが、親のバックが恐くてみんな手が出せないらしい。それをいいことに彼はチャラチャラと音をならし登校していた。シルバーアクセサリーといわれるものを全身に纏っているようなものだ。しかし、彼はある程度のマナーはわきまえている。それをクラスメイトたちが知っているので彼をみんなでかばい、なくなつたものをみんなで探した。

僕はそれには参加しなかった。理由は時間の無駄であること、大人数で探しても効率が悪いこと、何より彼をかばって僕にメリットがないからだ。このころの僕はメリットデメリットで行動していた。その原因となつた話は今はおいておくとする。

しかし、今回の事件には興味があつた。不思議な点はいくつかあるのに頭のいい生徒会のメンバーがそれに気がつかないということなどだ。犯人の目的は分かつたし、盗まれた物の在り処も分かつた。

ただそれを証拠とする物的証拠がない。それを探すため僕は“ある場所”へ向かっていった。その部屋には「生徒会室」とかかれた小さな看板がある。この部屋は今回の事件の舞台だ。ここにあった金庫の鍵がなくなったのだ。その金庫の中身は職員の個人情報がつまっていたファイルの束だった。滅多なことがない限り使われることはないが、数十年分の個人情報が入っているので金庫に入れたいたらしい。その鍵は代替わりしたとき新生徒会長へ認証状と一緒に渡される。そしてその鍵には代わりがない。コピーできない特殊なものらしい。その大きさは大体親指くらい。なくさないようにとキーホルダーと鈴がついている。

「……ああ、よく考えれば犯人は物的証拠を残すことができないのか。そうすると、犯人は一人だけになる……」

「神原？ お前なんでこんなところいるんだよ。看板見えなかったのかよ」

「紀伊、か……。うん、決めた。僕が君の罪を晴らしてあげるよ」

「は？ なんでだよ」

「たしか君の親は本のコレクターだよな？ 僕読みたい本があるんだ。それをタダで、もしくは半額で売ってくれるなら君の罪を消してあげるよ」

「……てめーの読みたい本のタイトルは？」

「“就活のススメ”っていう本なんだけど。ある？」

「あー、たしか親父が持ってたって、そんなんでもいいのかよ?!」

「先生に何か職をつけなさいといわれていてね。職業について知りたかったんだよ」

「そうかよ。その本でいいならタダでくれてやる。ただし、俺の疑いの目が消えてからだ」

「勿論だよ。よし、交渉成立。明日、楽しみにしてなよ」

「お、おう……」

ほしかった本をタダでもらえるという条件つきで、僕は紀伊と交渉した。

そして次の日の給食時間。

僕たちのクラスは放送室から一番近い教室でよくクラスメイトがそこへ訪れ下級生から給食をカツアゲしていた。下級生に関しては涙目だったが、先輩と後輩の関係からか何もいえない。先生方もこのことを知っているのだろうが、下級生達が何も言わないため何も出来ないらしい。

問題はそこではない。給食時間のある時間、各委員会からの連絡が入る。そこで彼らの昼休みを貰い、紀伊の疑いを晴らさなければいけないのだ。そして時間はやってきた。

「委員長からの連絡です」

放送委員の滑舌のいい言葉が放送器具から流れた。これを合図に僕は動いた。大抵の委員長はこの放送を聞いた後に放送室へ向かう。僕のいる教室からその様子は確認できた。一番最初に放送しなければいけないのだ。委員会に属している者は自分の委員会の連絡が終わった後もう他の委員会の連絡に耳を傾けない。最初に連絡すること、全員の耳に放送を連絡することが出来る。そのことを知ってか、生徒会は最初に連絡するという暗黙のルールがあるようだ。

「三年の神原です。今日の昼休み、全校生徒は体育館に集まってください。繰り返しです。今日の昼休み、全校生徒は体育館に集まってください。三年の神原からでした」

三年という言葉を強調するだけで、二年は必ず体育館へ集まる。三年に関しては普段目立たない行動をしている僕が何をするのかという好奇心から全員集まるだろう。先生方も同じ理由で集まってくれる。そうして舞台は整い、時間が来た。僕はたのんだ覚えはないのだが、放送委員からマイクを一つもらい、壇上へとあがった。

「こんにちは。今回皆さんを集めたのは先日、生徒会室の金庫の鍵がなくなった件についてです。今、僕のクラスは全員でその鍵を探しているところですが、僕は自分のやり方で鍵を見つけることが出来ました。しかし、今問題なのはそこではありません。問題なのは、

犯人が『なんの目的で』『誰に向けて』『いつ、どのように』『この犯行を行ったか』ということです。まずは犯人から突き止めましょう。生徒会の皆さんは僕のクラスメイトの紀伊君を犯人と見ました。しかし彼は犯人ではありません。まず、彼にはアリバイというものもあつたし、彼はそんなことをする人間ではありません。信じられないかも知れませんが、みなさんは知っていますか？ 彼はこの学校で皆勤賞候補であることとこの学校の図書室にある本のほとんどが彼の親からの寄付であること。それに、彼の親は大手の企業の社長です。金庫の中の個人情報がおかしいならそれを見るより自分で調べたほうが早い。そもそも彼が先生方の個人情報を知ってメリットはない。これが彼が犯人ではない理由です」

「あの、それだけで理由になるのでしょうか？ ただ単に彼が、紀伊先輩がみんなを困らせたいから、だからかも知れないじゃないですか」

と後輩兼今回の犯人である生徒会役員生活委員長の黒道颯（くろみちはやし）が質問してきた。話をそらしたかったからか、どうしても紀伊を犯人にしたいからかどこか焦つたように質問をしてきた。しかし、それは想定内の質問だつた。

「……犯人の目的は一つ。紀伊君をクラスから、学校から、孤立させることです。ある人物は、先生の次に遅く下校することが出来る。その人物はみんなが帰つたあと、一人学校に残り、時を待ち、鍵を奪つた」

「なるほどなあ……たしかにこれじゃあわからねえわ。おい、神原持ってきたぞ」

「遅い。時間を稼ぐのは楽じゃないんだ。まあ、今紀伊君が持ってきたこの鍵が金庫の鍵」

「と、その委員長（委員長）の鍵だ。今日、俺のカバンの中にコレを入れてこの事件を解決し俺を孤立させようとしたんだろ？」

「違う、僕はやってない！ 大体、僕がそんなことして僕にどんなメリットが……」

「早すぎる否定は肯定を表しますよ。まあ、理由なんて簡単ですし、この犯行にはトリックすらない。物的証拠がなくてもあなたが犯人だと断定もできる」

神原はそういった。このとき、誰が思っただろう。全て、神原の手の内のことだったと。黒道の返答も、紀伊の登場のタイミングも、全て神原の計算だった。

「もしその鍵が断定できる証拠だというのなら、その鍵が僕のだという証拠でも？ 僕の家は生憎とカード式なんだよ」

「まさか。鍵で証拠になるなら全部紀伊君に任せますよ。証拠なら貴方が言っただじゃないですか」

「は？」

「ほら、えーっと……そう、『違う、僕はやっていない！』でしたっけ？ 紀伊君はその委員長といったんですよ？ 指もささなかつた。何故金庫の鍵についているのが貴方のものだって分かったんですか？」

「……っ」

「もう終わりでもいいですか？ では、チェックメイトです」

そうして小さな鍵の紛失事件は先生からの生徒指導のみで幕を閉めた。

後日、神原は紀伊から就活のススメという本を貰おうとするが、断り、違う本を手に入れた。その本のタイトルは『つめチエスのススメ』という本だった。その本は今、静かにビジネスホテルのベッドに眠る神原の腕の中にある。

✦ ✦

これが僕の才能が開花したときの話だ。その後、紀伊君とは高校で別れ、それ以降面識もなく、お互いにこの出来事は思い出として残っている。でも、噂に聞いた話では紀伊君はお父さんの会社は継

がず、小さな店で店長として生活しているらしい。でも、それが本当かは分からないけどね。

【p a s t b o y】（後書き）

いかがでしたでしょうか？

感想などをもらえると嬉しいです。

【h i s t o r y b o y】（前書き）

神原たちのもとにある手紙が送られてきた。その手紙がきっかけとなっておこる、神原たちに降りかかる災難とは？

そして神原の過去とは？

騎士編スタートです。

【history boy】

『C＋Bの皆様へお願いがあります。今、私の屋敷ではある奇怪な事件が起こっており、村の皆は“竜がお怒りになられた”といった私の話をききません。警察にも頼ってみましたが全く相手にされません。そこで警察の方々になんども話を聞いてもらい、あなた方であれば受けてくれるかも、といわれたので今回手紙を出させていただきます。私の屋敷はただ今ホテルとして営業しております。宿泊代、通行費などはこちらが負担いたしますのでどうか依頼をお受けください。恐怖の中で怯える私をお助けください。ホテル青龍^{せいりゅう} オーナー 伊達露宗^{だて つゆむね}』

第三話【history boy】

神原たちの元にある一通の手紙が来た。その内容は神原の好奇心をくすぐるもので即座に受けるといった答えがかえってくるようなものだった。

——依頼者宅

「本日はお越しいただき誠にありがとうございます。私がこのホテルのオーナーの伊達露宗と申します」

そういつて依頼者である伊達露宗は頭を下げた。

遡ること数十分前、神原たちは指示された通行ルートでこのホテルにたどり着いた後、普通はチェックインなどをして部屋に荷物を預けるはずなのだが、神原たちと荷物は離れ離れになってしまった。正確には、神原たちと、荷物と五十嵐が、だが。

「いえいえ、礼には及びません。しかし、一つだけ、質問してもよろしいでしょうか？」

依頼人との受け答えは草加の役目となっていた。五十嵐は荷物番で、長谷川はホテルの散策、神原は草加の後ろで話を聞く。今回はこのスタイルでいくようだ。

「はい、なんでしょうか？」

「このホテルの名前はよく聞くので客足が多いと思っていましたが……今日は静かなので何かあったのかと思いましたが」

「ああ、それはですね、実は私、C＋Bの皆様だけでは心細くて私立探偵や、警察の方、各分野での天才と呼ばれる方をお呼びします。そうですね……確か十二人ほどだったと思います」

「その方々の名簿を頂いても？」

「ええ、よろしいですよ。後ほど部屋へお持ちいたしますのでそれまでお部屋でおくつろぎください。今、係りのものを呼びますので」
「分かりました。ありがとうございます」

草加は深く頭を下げ、依頼人が部屋へ出て行くのを待った。ガタ、と音をたてて襖を閉める音を聞いたのを確認し、神原に話しかけた。
「それで、神原。どうだ？」

「……手慣れてる」

「は？」

「あの依頼主、警察とかに手慣れてる。……少し気分が悪い、外に出てる」

「あ、ああ……」

神原は部屋から出た後仲居さんに頼み、ホテルの裏庭のほうへ出ていた。

（……見たことある風景、嗅いだことのある匂い、そして何より、聞いたことある声……。ここは、なんだ？）

「気持ち悪い……」

そのとき、ガサ、と茂みのほうから音が聞こえた。神原はすぐに身構え、周りの様子を探った。そして神原の肩にポンと手をのせたのは時間にしてとても短い時間である。

「！」

「待て、待てつて！ 俺だよ俺、轟政司（轟はとむら、政はせい）だつっの！」

「轟……なんだ、トドロキか」

「なんだとはなんだ。あ、そーだ。今よ、ホールんところに神原を名乗る女の子がきてるらしいぜ？」

神原の肩を叩いたのは轟政司（轟はとむら、政はせい）という青年で年はおおよそ神原と同じぐらいだ。そんな彼と神原は高校時代のクラスメートで“犬猿の仲”と称されるほど仲が悪かった。面白いくらいに意見が食い違うのである。だが、今は同じ職を持つものとして（神原に関しては副業）とりあえず仲を良くしているのだ。

「そう。それじゃあ、次あうときは黄泉の河で、ね」

「あいかわらず物騒だな……。ま、イケド？ ホールはここをでてまず左。暫らく真っ直ぐ進んで、右だ」

「お節介ありがと」

そして轟という男を去っていった。神原のポケットの中に一通の手紙を残して。

—— ホテル青龍ホール

「だから、言ってんだろ！ 私は“カミバラ”だつっの！」

「お客様！ 落ち着いてください！」

ホテル青龍のホールではカミバラを名乗る少し口のよくない女の子がオーナーである伊達露宗と対峙していた。

そこへちようど居合わせた神原由悟は少し面倒臭そうにしながらもそこへ向かった。

神原が面倒臭そうにしたのには理由があった。一つは、自分を名乗る女の子と面識があること。そしてもう一つは、そこに轟政司の次に天敵である人物がいたからである。

「伊達さん、どうしたんですか？」

神原はあくまで笑顔でトラブルへ立ち向かった。

「ああ、“神原”さん。実はこの女の子が自分が“カミバラ”といはじめてまして……」

「なっ！ 私はカミバラっていつてるだろ！ その男と一緒にするな！」

「はあ……伊達さん、彼女はカミバラですよ。ただし、僕と漢字が違います。彼女は上原由佳カミバラ ユカ。僕の上司にあたる警察でトップを争ったという上原さんの娘さんです」

「え、あの上原さんの？ これは失礼しました。では招待状はお持ちですか？」

「招待状？」

女の上原がそう聞くと、神原由悟の目が少し光った。

「伊達さん、彼女はC＋Bの一員なのですが、今回の事件においては危険すぎると思ひまして留守番させていたんです。ほら、女の子ですし、世の中物騒でしょ？ それが気に食わなかったようですね。彼女はこちらで預かるので仕事のほうにお戻りください」

「は、はあ……」

「さ、行こう」

神原由悟は上原由佳の手をひき、伊達から与えられた本館より少し離れた別荘のほうへ向かった。

「どういうことだよっ！ なんてあんたがここにいるんだ！」

別荘にはすでに五十嵐がソファでねていた。神原はそれを無視し、二階へと彼女を誘った。

「どうもこうもないよ。こっちは仕事で来てるんだ。邪魔されちゃ困る」

「そんなことじゃない！ なんで私があんたのグループなんかに入んなきゃいけないんだよ！」

「あの場では仕方なかったんだ」

半狂乱になんて騒ぐ彼女に反して、神原は彼女の質問に冷静に答えた。どうやら彼女は彼、神原のことを嫌っているらしく、早くこ

の部屋でて行きたそうだが、神原が唯一の出口を塞いでいるのでそれはかなわずにいる。

「……つもういい……あんたと話してたらこっちが疲れる」

「そ。じゃあ次はこっちから質問。招待状がないのになんでこの場所がわかった？」

「それは……」

「脅迫文」

「!?」

「持つてるんでしょ、見せて」

神原は確信をもって彼女に言った。彼女が渋々出した紙には『父ト共ニ、同ジヨウニオマエヲ竜ガ喰ラウ』と書いてあった。

「……その手紙が2週間前ぐらいに来た。父と関連して、竜が関連するところはここしかなかった。ホテル青龍、またの名を蒼龍……父が追った最後の事件現場……」

「……君は常に僕、もしくは草加、五十嵐でも長谷川でもいい。C†Bのメンバーと共に行動して。何を言われても、僕たちの目の届く範囲にいて」

「は？　なんでだよ」

「君はここで殺されたいの？　なら別にいいけど」

そして神原は「この部屋にいればある程度の安全は保証するよ。この別荘ないであれば自由に行動してもいい」と言い残してこの部屋を出ていった。

✦　✦

「おい、由悟ー！」

「……」

「かくれんぼかー？　よし、おじさんすぐに見つけるからなー」

まだ僕がC†Bという組織を作って間もないころ、僕にも父親のような存在がいた。父親代わりの男性の名は上原由貴かみばら ゆたかといい、子持

ちである。そんな理由で僕の面倒を見ていたが、一向に僕は彼になつこうとしなかった。今も彼から隠れるように本を読んでいた。僕がようやく物語のクライマックスを読もうとしたとき、みつけたという声の上から降ってきた。

「お前さあ、別に俺になつなくていいから話くらいはしようぜ？」

「……僕は誰とも仲良くするつもりはない」

「そんなこと言ふなよ」

上原は少し困ったように笑った。迷惑と思うなら離れればいいのに。

「由悟、警察っていうのはチームワークが大切なんだ。つまり、コミュニケーションが取れない奴は警察にはなれない」

「別に。ただ僕は面白いことをしてただけだ。人間関係とかを考えるのは面白いと思わない」

僕はこのとき何を思っていたのかは覚えていない。ただ、このときの僕に対する彼の言葉が、顔が、ひどく鮮明に僕の頭に残っている。

「由悟、別に俺は自分の仕事に誇りを持っていない。俺のことだって嫌いと思っけていてもいい。ただな、ヒトの命を、ヒトの生死を“おもしろい”なんて、ゲーム扱いするな。もちろん、自分の命もだ。それだけは言っておく」

滅多に怒らない彼をこんなにも怒らせたのは僕だけじゃないだろうか。そう思うほどに彼はよく笑う人物だった。そして、別れの時が近づいていく。

彼が怒った日からちょうど一カ月後、彼と僕とは一緒の部屋にいて別のことをしていた。僕は読書に没頭し、彼は旅支度をしていた。

「どこいくの」

「ん？ ああ、ちよつと北の方に用事があつてな。ああ、そうだ。俺が帰つてこなかったらあと、よろしくな。何年かたって、俺のこゝと気になったら“青い一つ目の龍”のところへ行け」

「……興味がわいたらね。だいたい、殺しても死なないような人が

何を言う」

「それもそうだな。じゃ、いつてきます！」
それが彼との最後の会話だった。

＋
＋

ホテル青龍はもとも蒼龍の棲む泉と言われていた。だが、今のオーナーはそれを無視し、そこにあった大きな池を埋め立て今のホテルを建てた。そこから何年後か、このホテルで不可解な死が相次いだ。その村に住む住民は龍のお怒りだ、天罰が下ったなどと言ってオーナーの話どころかそのホテルに泊まった客に対しても言った。そこでオーナーはこの村の歴史を調べようとするが、この村にそのような書籍はなく、調べようがなかった。だから今回、神原達とその他の天才達を呼び、犯人を見つけてもらおうという考えだ。

と、オーナーは十五人の天才達プラス二名をこのホテルで一番の大きな部屋である“泉ノ間”という場所に集め、これまでのことを話した。

今この部屋にいるのは、警察、検察、私立探偵、大学教授、学者などと言った日本の中でも名高い天才達だ。その中にニートなどといった天才もいる。神原のことだ。お互いにお互いの顔を知っている中、神原の顔を知る者はC＋Bと上原由佳、轟政司以外に居なかった。

「あー、オーナーさん？ 誰ですか、そこにいる明らかにこの場に相応しくない人たちは」

検察の江藤心えとうしんが神原達をさしてそう言った。

「ああ、こちらの方々は――」

「僕たちはC＋Bのものですよ。江藤さん」

神原はオーナーの言葉を遮って言った。

「僕はC＋Bのリーダーって言ってますかね、神原由悟です。で、こっちのオールバックが草加直人。そのツンツンが五十嵐勇人で、

そのパソコン中毒生……じゃなくて中学生が長谷川森羅。でこっちの女の子が……由佳です。どうぞよろしく」

所謂営業スマイルというもので神原は彼らに紹介した。

「僕八、氷野真人^{ひの まさと}っていうノ！ 多分この中で一番年下だヨー！」

「私は探偵事務所を経営しております、阿部^{あへ}と申します。以後お見知りおきを……」

「そういえば伊達さん、僕が聞いた人数より一人、少ない気がします…… どうしたんですか？」

「え？ ああ、富山様^{とやま}でしたら気分が優れないとかで部屋のほうにいらっしやいます」

「……富山、富山…… 由悟、富山義正^{とくま よしまさ}っていうヤツは確か……」

「——治せない病はないと豪語する天才外科医…… 伊達さん、案内して」

神原は何かを悟ったようにオーナーに案内を求めた。

このときから始まっていたのだ。ここホテル青龍——改め、蒼竜の棲む泉を軸にして起こる、呪いといわれた連続殺人劇が。

【history boy】（後書き）

本当は一話で終わらそうとしたら、無理だったので何話かにわけて投稿することにしました。

【poison boy】（前書き）

神原の過去、そして由佳の思い。
弱った神原です。

【poison boy】

上原由貴の死因は毒らしい。しかし、その毒の種類は分かっていないらしい。だから僕は毒について色んなことを調べた。生物毒に放射性物質。ファンタジーなもののまでも調べた。しかし、そこまですぐ調べたあと、ふと我に返り僕は何をしていたのだろうと思った。何故僕が嫌いな人間のために毒のことを調べなければならぬ。別に警察から命令など出ていない。それなのに、何故。そうして僕は調べることを放棄した。だけど、今ならわかる。何故僕は頼まれてもないことを調べ始めたかを。

第四話【poison boy】

神原たちは急いで階段を上がり、富山の部屋の前まで来た。オーナーの伊達の手にはマスターキーが握られており、皆、冷や汗をかいている。

「おい、富山！ いるなら返事しろ！」

五十嵐勇人がそう叫ぶも部屋の中は誰もいないかのように静かである。そこで伊達は鍵穴に鍵を入れ、中をあけてみると、鉄くさい匂いが広がった。――否、ただの鉄の匂いではない。人の体内に流れる液体の匂いだ。

「な、何よ、この血の匂い……！」

誰かがそう言ったが、神原は別段気にもせず、ドアを開けてすぐにあった電気にスイッチをおした。パチという音とともに明るくなったこの部屋には生きた人間はいなかった。ただ、この部屋にいたのは、胸を何かが書かれた紙とともに矢で貫かれている富山義正だった。

「この時代に矢……？ じゃ、なくて現場は……024号室、被害者は……」

「とやまよしまさ富山義正三十九歳。職業、医者。死因は……刺殺か、出血多量死か……」

「毒だネ。矢の鉄部分が変色しているヨ」

氷野がそういうように矢の鉄製部分は本来の鉄の色ではなくなっていた。氷野という少年は小学5年生でありながら歴史、特にアジア史の知識が豊富な小学生だ。彼が天才と呼ばれる所以は所謂子役の天才で何をやらせてもその役に完璧になりきるといふ実力の持ち主だからである。そんな天才少年は自らの知識と経験をフル活用させ、毒という考えを持ち出した。

その考えには神原も同じだったらしく特になにも言うことなく天才少年の考えを聞いた。

「あのサ、僕が思うにこれは連続殺人って考えていいんじゃないかな？ ほら、何年か前のこのホテルでの最初の事件、確か死因は毒殺でしょ？」

「あ、はい。そうでうが……」

「024号室で毒殺……じゃあ次は右目を抉られる力、殺される力……ま、楽しもうヨ、この状況をサ」

「“青い一つ目の龍”……“青龍”……“蒼竜の棲む泉”……」

神原は一人小さく呟く。その様子がある人物は見逃さなかった。

思えば最初から神原はおかしかった。気分が悪いと外に出たり、急に女の子を連れてきたり、目の前の天才少年を前にしても何もいわなかった。少しくらい、反論があるだろうに。

± ±

神原さんがこんなに静かな日があったのだろうか。最近のことを思い出すだけでも皆無だ。以前草加さんに聞いたことがある。神原さんが最初で最後に尊敬した人物のことを。その人が死んだ場所はココだった。先程の被害者のように、死因は毒殺。その他に右目があったり、所々傷があったという。家族に見せることなくその人は

焼かれ、家族がその人を見たのは骨になった後だという。その死体を本人と確認したのは神原さん。そのときはまだ成人に達していなかったらしい。

「神原さん、今回のつて……」

「まだ続くよ」

「え？」

どういうことだろうか。静かに、風に叩かれている窓を見ながら思いふけていたはずなのに、推理なんていつ……。

「由貴は一度にやられたけど、富山は毒殺のみ……。何回かに分けて殺す気だよ。ま、大体ターゲットは分かっているし、僕らはそれを守ればいいだけだからね」

「ターゲットつてまさか……由佳さんじゃないですよ？」

「……きつと、父と同じように殺されるだろうね。毒を盛られて、目を抉られて、裏切られて、もしくはそれに相当する絶望を与えられて、犯人の目星はついてるけど、証拠がなあ……」

「証拠？」

「そう、証拠。あと動機かなあ」

そういいながら、僕の目の前にいる天才は自分の小さなバッグから手紙のようなものをだし、読み始めた。時折、懐かしんだり、後悔したりと色んな顔を見せながら。その手紙は年代物なのか少し色が褪せている。しかし、破れた部分などは一切ないのでとても大事にされていたことが分かる。今だつてこの手紙はよくクッキーなどが入っているような缶箱から出てきた。きつとこの男にとつて大事なものののだろうか。この天才が人生で唯一後悔した、悲しい話の結末なのだろう。神原由悟が最初で最後に尊敬した人物“上原由貴”という一人の男性の結末が書いているのである。この手紙を読むことは僕たちに許されてはいない。これは、彼の思い出なのだから。

「もしもし？ ええ、順調に進んでいますよ？ ああ……はい、はい。もちろん指示は俺が出てますけど？ あー、分かりましたよ。ま、騎士^{ナイト}としての役目は果たすつもりですって。ね？ 黒^{キン}の王^グ」

そして朝はやってくる。

「み、皆様。お食事の準備が整いましたのでどうぞ竜の間へ……」
このホテルのオーナーである伊達は仲居に客である彼らを一ヶ所へ集めた。

「皆様、昨晚のことですが……」

「警察に連絡したの？」

「それが、つながらなくて……」

そのとき、周りがざわめいた。その中で一人だけ、パソコンを立ち上げカタカタとキーボードを叩く。一通り終わったのだろうか、口を開いた。

「……一応メール送つといたけど、ちょっと怪しいよ。届かないかも」

「森羅ので駄目、か……」

「由悟、今朝方俺の携帯に入ってきた情報だが“何者か”に電波を傍受されたらしい」

「止めたわけね、警察のほうは。ならいいや。伊達さん、暫らくC＋Bは自分の部屋で過ごします。昼食もそこに運んでください。あと、外から鍵かけといてください。そうすれば僕らのアリバイは成立することが出来るので」

口早に神原は言い、急ぐようにその場を離れた。彼に続いてC＋Bの仲間達はその場を出て行った。

伊達に用意されたロッジに移動し、神原はすぐに自室へ籠もった。皆に自分を暫らく一人にしてほしいこと、上原由佳を絶対にここから出してはいけないことを言って部屋に籠もった。

——頭が痛い。思い出すな、由貴を殺した犯人と今回の犯人は一緒。なら動機は？ 由貴の時ののは分かる。でも、富山を殺した理由は？ 思い出すな、思い出すな。何を見落とした？ 何を……。

神原は悩む。強がりな、プライドの高い彼には相談相手などもない。ひとりで解決してしまう。精神への負担はとても大きい。

上原由佳は言う。

「アイツ、どうしたんだ？」

「……神原さんはね、君のお父さんが死んでからずっと死因について調べてた。それでよく仕事サボったりするけど、毎回脈ナシでも落ち込む暇なんて無くて……相談できる人もいないんだよ」

「？ お前らがいるじゃん」

「由悟が相談できる人はこの世でたった一人だけだ。その人亡き今、由悟を救える奴は居ない。なにより、今まで由悟が事件に対して真面目になったことなんてほとんど無い。だからどうすればいいのか知らないんだ」

まして俺達はいわば由悟の手駒。こっちからアクションを起こすことは許されてない。と草加は続ける。それを聞いた上原由佳は、おかしいとただ思った。仲間なら、声をかけたりだとか、ただそばにいるとかあるだろうにと。上原由佳は静かに神原の元へ行った。

扉を一枚隔てた先に男はいる。そう分かっているが一步踏み出せない上原。ポツリポツリと話し始めた。

「……父さんの毒、昔中国でつかわれていただろう鳥の毒だつて」

「……知ってる」

「……長谷川さんが言ってた。父さんが死んでからアンタ、ずっと犯人捜してたって」

「……」

「そんなこと知らずに今まで暴言吐いててゴメン。でもさ、少しくらい仲間頼ったらどう？ 私がいうことじゃないけど、アンタがそうやって溜めて、辛くなるなら話して楽になったほうが、仲間も楽になるんじゃない？」

「……。君は本当に由貴の子供だね。純粹で、節介焼きで、黒いことを嫌う。——僕は頭はいいかもしれない。それは自負してる。だけど、きつと誰よりも弱い。由佳、暫らくそこに居てくれない？ 君にしか弱みは見せない」

「ああ、いいよ、由悟」

静かに彼らは瞳を閉じる。

——由悟、この手紙は俺が死んだ後に届くようになってる。仕掛けは自分で考える。ま、とりあえず……俺の娘にな、由佳っていう俺似の可愛い娘がいるんだ。お前は変なところで意地張るからな、いつかお前と由佳が一緒の事件に居たら由佳はまあ、チェスで言うクイーンの役になるだろうさ。お前が許すなら、由佳がそう望むなら、今お前が考えてる組織の中に入れてやってくれ。死んだ後だが一生の頼みだ。代わりと言っては何だが、この手紙と届いた荷物やる。売れば金になる、持っていればいいことがある、らしい。それから——

【poison boy】（後書き）

たぶん次でこの話は終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9225o/>

C†B

2011年11月15日08時32分発行